

# 『[データ分析]大学入試 アップグレード 英文法・語法問題』 を用いた音読活動

磨田 直子

## 1. これまでの活用方法を変える

『[データ分析] 大学入試 アップグレード 英文法・語法問題』(以下『アップグレード』)は、従来、生徒の家庭学習用で活用してきた。生徒には事前にテスト範囲表を渡し、週1回、授業内で確認テストを実施、そして点数を評価に入れる。もっぱら生徒の自学用としての活用である。受験勉強で文法・語法もしっかり身につける必要があるにせよ、こうした方法に何か工夫できないものだろうか、と常々思っていた。

実際、生徒の学習の様子を観察していると、多くが『アップグレード』の問題を目で追って、解説を黙読している。だれも音読していない。視覚的な情報のインプットに多くの時間を費やしていた。だから、問題文に解答を入れて音読してごらん、と生徒に言う、彼らはスムーズに読めないこともしばしばあった。

確かに、英文法・語法問題の「知識」を身につけることがゴールなのであれば、それで十分かもしれない。しかし、小テストを8割以上得点している生徒でさえ、その文を音読させると、正しい発音でスムーズに音読できない。言葉の学習なのに、「音声」をまったく排除した学習は英語力の向上につながるとは思えない。また、言語の運用能力を最終的に身につける点から見ると、知識の獲得だけでなく、それを使う技能も身につける必要があるだろう。本書のはしがきにも「受験英語と実用英語との橋渡し—将来も役に立つ!」と書いてある。これを実現させるために、今までとは違ったアプローチを試してみるとよいのではないかと考えた。

私は、生徒には、英語の文法・語法の知識や英文の読解力・作文力だけでなく、最終的には英語を話す力も身につけてほしいと思って授業を展開している。そのためには、音声を重視した授業、音読をベースにしたペアワークやグループワークといった生徒同士の活動を入れた授業であるほうがよいと信じている。完全なコミュニケーションアプローチではな

いにしても、それに少しでも近い形で『アップグレード』を使って活動をしたかった。そこで、文法・語法の知識の獲得だけでなく、それを正しく使える技能の獲得も目指し、グループで音読を取り入れたテスト、つまりグループテストを行い、合格するかしないかで評価するように変更した。

## 2. グループテストとは

グループテストは、別の高校で同僚だった湧井智恵先生から教えていただいた英語活動である。生徒は4、5人ほどのグループを作り、教師から指定された問題を1人1人口頭で答えていくというものだ。もし同じグループのメンバーが答えがわからなくて困っていれば、他のメンバーに教えてよいルールになっている。お互いを助け合い、チームワークを育むグループ活動だ。

私はこのグループテストに時間制限も設けて実施した。なぜなら、グループテストを実施し始めた頃、グループによっては準備不足で時間を浪費したり、緊張感もなかったりしたからだ。また、英会話においてクイックリスポンスは大事だと思っている。質問後、回答までの間が長いと、反応がないという印象を与える恐れがあるからである。

実際、タイムリミットを設けると、クイックリスポンスが促される。生徒も、テストに合格するために自然と何度も音読練習をするようになる。時間内に答えなければならないことへの軽いプレッシャーを得るようで、テスト前は緊張している生徒が多かった。しかし、時間内に全員がつつがなく合格できたときは、大きな達成感を得たようで、「やったー」と歓声を上げることもあった。

『アップグレード』でグループテストを実施する前にすでに、採用している「英語表現Ⅰ」の検定教科書の演習問題を使ってグループテストを行っていた。生徒に事前に答えを配付し、予習としてノート

に解答して丸付けをすることを課題とした。教科書の演習問題には書き込み禁止にし、グループテストのときは、この何も記入されていない教科書を使った。念のため、テスト前に予習が行われているか、教科書に書き込みがないかをチェックした。また、ワークシートを配付し、グループテストに合格するとスタンプを押し、達成したことを「見える化」した。

### 3. 音読を繰り返す

グループテストまでに、生徒は一度演習問題を解き、答え合わせをする。そして、問題を何度も解きながら、音読を繰り返す。どの問題が指定されるかわからないうえ、時間制限があるので、指定された番号の問題を即答できるまで何回も音読練習が必要だ。そのため、週末課題としてもテスト勉強に取り組めるようにした。

文法項目の自動化が音読の効用の一つであるならば(土屋, 2004), 『アップグレード』の問題英文を、単に正解番号を選ぶだけ、並べかえるだけの学習に留まらず、音読を通して学習することは大事なことだと思う。確かに、『アップグレード』の英文は大学入試問題なので、実用英語の習得という点で関連が薄いように感じるかもしれない。しかし、最新の10年分延べ4000回の大学入試問題のデータベースと *Time* 誌7年分を含む実用英語のデータベースを基に頻出問題が精選されている。つまり、実用英語も考慮されていることを考えれば、『アップグレード』の音読活動によって、実用英語の語彙・語法・文法のデータベースを自分の頭の中に作り上げることができるのではないだろうか。また、そのデータベースは、大学での英語学習や社会に出て英語の文書やメールを書くときに役立つはずだ。

音読練習の回数は30回くらいすると自然に英文が頭に入っていきそうだ(今井, 2009)。何度も音読することは、生徒が能動的に行うことである。文字を見る「目」からの情報処理だけでなく、自分の声を聞く「耳」からの情報処理も行い、さらに音読するとき口と声を使って英文の理解を集中して行っている。音読は集中力が必要な活動である。

私は、授業の中で音読練習に時間をかけている。それは、私たちは日常的に英語を使う機会が乏しく、生徒にとって実際に英語を運用する機会といえ、

ALT との授業や留学生との交流など制限されるため、そうした状況で、授業の中で音読したり、家でその練習として繰り返し読む訓練をしたりすることは、運用の機会を増やすことになると思うからだ。

### 4. 『アップグレード』を使って

教科書が1年生の1月に終わったので、その後『アップグレード』のグループテストを実施した。生徒には、週末、『アップグレード』の勉強をさせるため、グループテストの対象となる範囲の問題をA3用紙1枚にまとめたワークシートを与えた。範囲は、紙ベースのテストで実施したときと同じぐらいで、ユニット1つ分(例 Part 1\_ 文法\_1 時制)とし、「11 関係詞」のように問題数が多い場合は、Part 1, Part 2 として2回に分けた。また、「( )に入れるのに不適切なものを選びなさい。」という問題は、選んだあとになぜそれが不適切なのかを説明しなさい、という理由の説明も設問に付与した。

テストの概要は次の通りである。

- 1) 生徒は1人3問答える。
- 2) A3用紙1枚分の範囲を3分割し、最初の範囲から生徒1人に1問ずつアランダムに問題を指定する。終わったら、次の範囲へ移り、最後の範囲まで繰り返す。問題指定は、英語で問題番号の数字を言う。
- 3) 生徒は指定された番号の問題を探し、適切な答えを選んで全文を正しく読む。アクセントやイントネーションに気をつけて読む。
- 4) 時間制限がある。1問につき10秒間で答えるので、3問で30秒である。ただし、グループで教え合うことを考え、1グループに20秒時間を追加した。だから、4人グループであれば、全体で2分20秒になる。
- 5) メンバーが答えに困っている場合は、他のメンバーがヒントをあげるのはいよい。答えそのもの(「2番だよ。」など)を直接伝えるのは禁止。もし、他のメンバーが答えを言ってしまった場合は、やり直しとなり、他の問題を再度答えなくてははいけない。
- 6) グループテスト当日は、最初に、発音の難しい単語を黒板にリストアップし、アクセントに気をつけて発音練習をする。
- 7) テストの順番は、トランプで決める。グループリーダーが引いた番号で順番が決まる。

- 8) 1番を引いたグループのメンバーは教卓に集まって、教師の周りに立ち、答えていく。
- 9) 答える生徒の順番も並び順ではなく、アトラダムに教師が指定する。
- 10) 授業内でテストを受けることができるのは1回だけで、もし不合格ならば、休み時間や放課後にグループで再テストを受ける。

## 5. 授業での様子

グループテストには緊張感がある。面接試験のように、何度も練習してきても、どうしても言い間違えてしまったり、頭が真っ白になって答えたいことを正確に言えなかったりすることがあるが、それは妙なドキドキ感があるからだ。グループテストでも、生徒が教卓を囲み、タイマーのスイッチとともにテストが始まると、聞き耳を立てて教師の言う数字を聞き取ろうとする。正確に数字を聞き取って、指定された番号の問題をすぐに見つけて答えないとやり直しなので、どの生徒も集中している。

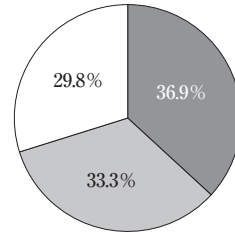
生徒が読む英文の速度は速い。1人1問10秒の持ち時間で、グループ全体でプラス20秒あるのだが、実際にテストが終わると、残り時間は余裕がある場合が多かった。中には30秒も残して終わるグループもあった。テストが終わると、ほとんどの生徒が安堵の声をしていた。小テストで答えの数字を書くだけならば、ここまでの緊張感はない。また、小テストのために音読をすることもないだろう。

## 6. 生徒の反応

こうしたグループテストは、確かにそれを終えるまで、生徒にとっては負荷がかかり続ける。どの問題が当たるかわからないので、どれにでも答えられるように、百発百中になるまで練習をせざるを得ない。答えられないと時間が経過して不合格になるからだ。さらに、『アップグレード』の問題は教科書の演習問題より難しいため、負荷は非常に大きいようだった。

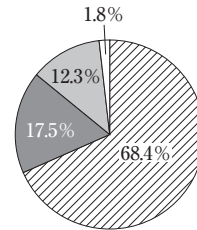
実際、約1年半実施したグループテストについて、生徒(5学年57名)にアンケートを取ったところ、グループテストの有無の是非については、約4割が「あったほうがよい」、3割が「どちらでもよい」、残り3割が「ないほうがよい」という結果で、生徒にとってグループテストが苦しかったような印象を受けた。

1. グループテストについて、該当するものを1つ選んでください。



■ あるほうがよい □ ないほうがよい □ どちらでもよい

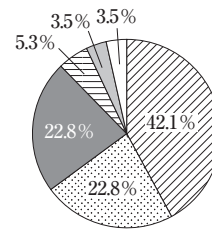
3. グループテストのために何回読む練習をしましたか。授業中の練習も含みます。1つ選んでください。



☑ 1~10回 ■ 11回~19回 □ 20回~29回 □ 30回以上

音読の練習回数を尋ねると、30回にはなかなか届かず、7割近くの生徒が1回~10回で、しかも学習するのは前日だけという、音読練習にける時間を十分取っていない問題点も明らかになった。

6. グループテストをすることで、グループテスト前に比べ自分の音読について変化がありましたか。該当するものをすべて選んでください。



☑ 音読の練習が増えた ☑ 音読のスピードが速くなった  
 ■ 発音やアクセントを意識するようになった  
 □ 音読がうまくなった □ 音読が嫌いになった  
 □ その他

グループテスト実施前後の音読についての変化を尋ねると、約4割が「音読の練習が増えた」、約2割がそれぞれ「音読のスピードが速くなった」「発音やアクセントを意識するようになった」を選んでいった。

また、生徒にはグループテストについて振り返りを書いてもらった。よかった点は、大きく次の3つあった。生徒の記入内容もあわせて紹介する。

1つめは、発音や読みのスピードが改善したことだった。

- ・発音やアクセントを意識して音読するようになった
- ・発音が上手になった
- ・正しい発音が身についた
- ・読むスピードが速くなった
- ・意識してやることで音のつながり、消える音など、英語を読むスピードが速くなり、うまくなった

2つめは、お互いに教え合うことができてよかったということだった。

- ・みんなで教え合える
- ・みんなと発音の確認ができる
- ・人と協力する力がついた
- ・英語力が身につく。お互いに助け合える
- ・チームで合格するという意識があること

3つめは、責任感が生じることで学習の動機付けとなったことだった。

- ・勉強のモチベーションが上がる
- ・メンバーに迷惑をかけないようにするために、普段より熱心に英文を覚えることができる
- ・自然に足を引っ張らないようにと、強制的に勉強すること
- ・焦ってちゃんとやる
- ・テストになるので、普段音読練習を一人でするよりやらなきゃとなる
- ・責任感があること
- ・自分がやったことや、やらなかったことがチームの結果につながるから、責任をもてるようになるところ

グループテストのねらいの一つに、「正しく音読すること」があり、生徒自身がその目標を達成できたことはよかったと思う。また、生徒はグループのメンバーとチームワークを育むことができたことがわかる。テストでは、指定された問題の解答がわからない場合、他のメンバーがヒントを教えていることになっている。だから、互いに助け合う意識をもち、教え合い、そして感謝し合う活動としてうまくいったのではないだろうか。それは、グループテストを教えていただいた湧井先生のおっしゃっていたことでもあった。最後に、自分のためだけでなく皆

のためにもグループテストに合格するために、学習をするという意識が生まれたことがわかる。皆でいっしょに合格しよう、という意識がチームワークを育みながら培われてきたのだと思う。

その一方で、グループテストの課題も見つかった。

- ・連帯責任なのでプレッシャーが大きすぎる
- ・GT(グループテスト)が終わると、基本すぐ忘れる
- ・理解せずに答えだけ暗記するという方法に逃げることができる点

グループテストは、チームワークを育む一方で、各メンバーに合格への責任を強く感じさせて、大きなプレッシャーを抱かせてしまう。正しい解答を見つけて、正しい発音で時間制限内に英文を読むことが必要になるため、準備不足だと当日のテストは厳しい。そのため、生徒には、前日だけ10回ほど読むのではなく、毎日コツコツと『アップグレード』の問題を解き、解説をしっかりと理解したうえで、音読を繰り返すようにしよう、と納得してもらう必要がある。

最後に、「グループテストと私」というタイトルで自由記述をしてもらったところ、これまでの苦勞を吐露する言葉や、「英語の力がついた」と言う前向きな言葉など、様々だった。「友情と信頼」「苦手でもやれと言われたらやります。」「面倒だけどやるしかない。たまに楽しい。」という言葉は印象的である。ペーパーテストにない緊張感や負荷は大きかっただろう。そのプレッシャーに打ち勝ち、必死に学習して合格し続けてきた生徒は本当に素晴らしいと思う。

## 参考文献

- 土屋澄男(2004).『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』研究社
- 伊東治己(2008).『アウトプット重視の英語授業』教育出版
- 今井康人(2009).『英語力が飛躍するレッスン』青灯社
- オンデマンド eLearning (Cambridge Learning Management System) *Teaching communicatively*

(新潟県立柏崎翔洋中等教育学校 教諭)